日本ＳＯＤ研究会報

特集 愛飲者インタビュー

悪性リンパ腫 ステージⅣ 余命宣告から4年 今日も元気です

福岡市にお住まいの遠藤洋子さん（69歳）

発行元 日本ＳＯＤ研究会 宮城
住　所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川 1-15-2 Ｂ棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
http://www.niwa-medical.com

ＳＯＤとの出会いは アトピー性皮膚炎

「子供の頃から元気で、大病などはしたことなかったんですよ」

と、はつらつとしたお声で話してくださったのは今回の愛飲者、遠藤洋子さん。結婚して３人のお嬢さんにも恵まれ、平穏無事、幸せな人生を送ってきました。

「しいてあげると、長女を出産してから体質が変わったようで、ひじやひざにアトピー性皮膚炎が出るようになったくらいでした」

長女のご出産時が１９７８年といいますから、かれこれ40年ほど前になります。まだ世の中がアトピー性皮膚炎という病気を今ほど認知していなかった時代でした。

「以来、毎年、夏になるとあせもみたいに出るようになって、秋になると治まっていたので放っておいたんです。それよりも立て続けに娘を産んで、３人の子育てに忙しくてそれどころじゃなかったんでしょうね」

ただ、このアトピー性皮膚炎については、丹羽先生が講演や著書でおっしゃってきたことが頭をよぎりました。それは、１９７０年代に入ってから重いアトピー性皮膚炎の患者さんが増えたということです。丹羽先生いわく

「昔は成人のアトピー性皮膚炎はほとんどいなかった。たいていは幼児期から始まり、小学校に上がるころには治っていた。しかし、環境汚染がひどくなった１９７０年前後から成人のアトピー性皮膚炎が急激に増加し始めたんです。原因は環境汚染。高度経済成長の象徴である自動車が増え、排気ガスを出す。工場の煙突からも窒素化合物が排出される。農場やゴルフ場に撒かれる農薬、除草剤。酸化した脂肪を含むスナック菓子やジャンクフードの蔓延。結果、体内に活性酸素や過酸化脂質が増え、

アトピー性皮膚炎の患者さんが激増するようになったんです。とくに工場の多い工業地帯に多かった」

洋子さんが最初に出産されたのが１９７８年になります。そして生まれ育ったのが、４大工業地帯といわれた北九州工業地帯に含まれる福岡ですから、このときのアトピー性皮膚炎発症は決して体質が変わっただけではなかったのかもしれません。

「そういえば、当時、周りにもアトピー性皮膚炎の人が増えていました。子供も大人も。なかには全身にアトピー性皮膚炎が広がり、頭の中まで真っ赤になっていて、かわいそうな人もいました。私も、夏になるとひじのあたりが真っ赤になっていたので、いつかこれがひどくなっていったら困るなとは思っていたんです」

子供たちが学校に行くようになり、育児も一息ついたころ、ようやく洋子さんはアトピー性皮膚炎をなんとかしようと決心しました。

「病院ではなく、近所に評判のいい薬局があったので、まずは薬局で塗り薬でも処方してもらおうと思って行ったんです。そうしたらそこの人が私の腕のアトピー性皮膚炎を見て、すごくいい先生がいるからその先生の診療を受けてみないかと勧めてくれたんです。それが丹羽先生でした。同時に、丹羽先生のＳＯＤを飲んでみないかといわれ、10包くらいゆずってくださったんですよ。それを1日に1包、10日間飲んでみたら、1週間目くらいからかゆみがなくなり、ゆっくりと赤みがひいていくのが分かったんです。身体に悪いものも入っていないし、これはいいものだと思いましたね」

すぐに薬局に行き、ＳＯＤを一箱購入したのでした。一日1包の服用でしたが、その夏はアトピー性皮膚炎に悩まされることはなかったそうです。

「これはいいものに出会ったと思いました」

以来、夏が近づくとＳＯＤを一箱購入し、飲むという習慣がしばらく続いたそうです。そのうち夏になってもアトピー性皮膚炎が出なくなり、飲むことを何年か忘れていたといいます。

「ところが、今度は、次女が大人になってからアトピー性皮膚炎になったんです。ホテルの接客という仕事をしていたので困っていたんです。病院に行ってもステロイドの塗り薬もらうだけで治らないって」

遠藤家は、一番上の娘さんが調剤薬局にお勤めということもあり、薬のことには詳しく、ステロイドは使い続けると体に良くないとアドバイスをしてくれたそうです。

そして、お母様に、

「お母さんが前に使っていたＳＯＤがいいんじゃないと言ってくれて、すぐに次女に飲ませたら、たったの５日でかゆみや赤みがひいたんです。若いから早かったんでしょうかね。娘もびっくりして、会社の仲間や友達に勧めていましたよ」

白血病を克服した記事を会報で知り、丹羽療法を

それは4年前にさかのぼります。お嬢さんたちもそれぞれが結婚し、夫婦ふたりだけの日々を送っていた洋子さんに突然病魔が襲いかかりました。

「最初、首のあたりにしこりのようなものができたのが最初でした」

小さなしこりで痛みもなかったことから、歳をとればコブのひとつくらいできるかもと放っておいたそうです。

「それが少しずつ大きくなって、そのうちにお腹が張ってきたんです。胃の上から何かに押さえられているみたいに」

さすがにこれはおかしいと、すぐに病院に行ったところ、リンパ腫の疑いがあるから大きな病院で検査を勧められました。

「そしたら悪性のリンパ腫（※注1参照）で、血液のがんみたいなものだといわれたんです。おまけに横隔膜に腫瘍があって、それが胃を圧迫しているとかで、なんだかよくわからなかったのですが、大変なことになっていたみたいです。私も、身体がだるいし、熱はあるし、そのまま入院でした」

このとき、洋子さんは、悪性リンパ腫のステージⅣという診断を下されていました。医師からは、手術は無理で、余命3か月といわれていたそうです。詳しいことを聞いていたのは、薬局に務めていた長女でした。手術は無理。できる治療法は、抗がん剤と放射線、造血幹細胞移植だといわれたそうです。

「抗がん剤と放射線と血液の輸血（造血幹細胞移植のこと）、どれもイヤでした。でも、入院中に放射線と抗がん剤治療は数回して、ちょっと回復したところで退院したんです。病院なんかイヤでしたから」

どうしてイヤだったかというと、洋子さんはＳＯＤを飲んでいた時から、毎回届くＳＯＤ研究会の会報を読んでいたのです。

「丹羽先生の話なんかを読むと、抗がん剤は毒で、百害あって一利なしと言っているじゃないですか。抗がん剤を使うと、がんが小さくなるまえに人間が死んでしまうと」

そして、会報のなかに、白血病で余命宣告を受けた人が丹羽先生の治療で助かったという記事を見つけたのでした。時期からしてその記事はおそらく、193号に掲載された、テニスプレイヤーの辻田さんの記事ではないかと思います。辻田さんの場合は急性白血病で、病巣にリンパと白血球の違いがありました。しかし、どちらも血液のがんであることには変わりません。

「その記事を読んで、その方が白血病で死にそうだったのに1か月で元気になられたと知り、これはもう丹羽先生のところしかないと思いました。娘もＳＯＤを勧めてくれて、退院と同時に一日に10包くらい飲みましたよ。そうしたら、数日で身体がものすごくラクになったんです。ああ、もうコレしかないと確信しました」

そうして福岡の丹羽先生の診療所を訪ねたのが3年前のことでした。

「先生に治るんですか？って聞いたら、治る人もいるが、あんたの場合は完全には治らん。しかし、余命何か月なんていうことはないから安心しなさいって言われまして、嬉しかったですね」

先生から処方された生薬とＳＯＤを飲み始めた洋子さん。10キロ余り体重が落ちてすっかり体力をなくしていましたが、

「どんどんラクになっていきました。病気の時は、あっ、今も病気ですが、なんか治っている気がして、とにかく病気の時は、外出して帰ってくると寝込むくらいぐったりしていたのですが、ＳＯＤを飲むと、すぐに体力が回復するんです」

病気が発覚してから4年。定期的な検査に行くと、先生も驚くとか。

「とにかく悪くなっていないんですから驚きますよね。この世には神様がいるんですよ。ありがたいこ

とです。なんかあれば丹羽先生がいらっしゃる、ＳＯＤがあるということが心強いです」

おそらくお嬢さんにお話をうかがえば、もう少し病院とのやりとりや細かい症状などが分かったのかもしれませんが、いまここに、洋子さんがお元気でインタビューに答えてくださっていることが何よりも真実だと思います。ありがとうございました。

※注1　悪性リンパ腫とは

悪性リンパ腫は、血液細胞に由来するがんの1つで、白血球の1種であるリンパ球ががん化した病気です。全身のいずれの場所にも病変が発生する可能性があり、多くの場合は頸部（けいぶ）、腋窩（えきか）、鼠径（そけい）などのリンパ節の腫れが起こりますが、消化管、眼窩（がんか）（眼球が入っている骨のくぼみ）、肺、脳などリンパ節以外の臓器にも発生することがあります。

首や腋（わき）の下、足の付け根などリンパ節の多いところに、通常は痛みのないしこりとしてあらわれます。数週から数カ月かけ持続的に増大して縮小せずに病状が進むと、このしこりや腫れは全身に広がり、進行するに従って全身的な症状がみられるようになります。全身的な症状としては発熱、体重の減少、大量の寝汗を伴うことがあります。悪性リンパ腫と診断される人は60歳ごろから増加して、70歳代でピークを迎えます。

治療方針は、適切な病理診断と病期分類に基づき、全身状態を考慮して決定されます。主な治療法は化学療法と放射線治療です。治療効果が十分でない場合は、さらに強い化学療法や造血幹細胞移植などが行われます。

（国立がん研究センターがん情報サービス HP より）

BOOK 紹介

『医療経済の嘘』

病人は病院でつくられる

森田洋之著（ポプラ社刊）

病人は病院で作られる
病院や病床が多い県に住むと医療費が2倍になる

今回紹介する本は、これまでのように直接病気や健康に関係するものではないのですが、医療って、病院っていったいなんだろうという根本的なことを見直す一冊です。

私たちは、引っ越しを考えるとき、いろいろな条件を考えます。駅の近くがいい、学校や買い物の便利なところ、公園が近い環境のいいところなどです。なかでも高齢になるとほとんどの方が、病院、それも設備の整った大病院が近くにあると安心だと思っています。しかし、それは本当に必要なことなのでしょうか。

『医療経済の嘘』の著者、森田洋之医師はそのことを問いかけ、綿密なデータをもって私たちの大きな錯覚について教えてくれています。このことを知ると知らないのとでは、これからの高齢化社会における病院との付き合い方が変わるかもしれません。

財政破綻した夕張市
病院がなくても住民の健康は変わらなかった

著者の森田先生は、もともとは一橋大学で経済学を専攻していたところ、知り合いの勧めで医師を志し、医大に入り直したという変わり種。何がなんでも医師にというところからのスタートではないぶん、自分は医療知識を深め、技術を磨くことこそが善で患者さんのためになり、国民の幸福に貢献することだと思っていたそうです。しかし、医師になって派遣された療養病院の光景に愕然としたといいます。

「ただただ白い天井を見つめたまま寝たきりの高齢者がずらりと並んで胃ろうしている光景を見たとき、それまで自分が磨いてきた技術や知識が善に思えなくなってしまったのです。税金を使って国立大学に12年（経済学部6年医学部6年）も通わせていただいたにもかかわらず、自分のやっている医療が国民の幸福に寄与していると思えなくなってしまった」

といいます。医師なんかやめてラーメン屋になろうかと本気で思うくらいつらかったそうです。その負い目からか、住民に近い地域医療を求め、夕張市の診療所に行きました。

夕張市といえば２００７年に財政破綻し、それに伴い私立総合病院も閉鎖になりました。外科も小児科も人工透析医療もすべてなくなったのです。市に１７１床の入院できる唯一の医療機関がなくなり、代わりに19床の診療所になりました。住民は不安で仕方ないはず。助かる命も助からないんじゃないか、市民は早死にするんじゃないかと。

ところが医療崩壊を境に夕張市の高齢者の医療費が低下していたことが分かったのです。そりゃ、病院にかかりたくても大きな病院がなければ医療費は減ります。

「人口も減っているのだから医療費も減ると思いますよね。しかし夕張から出ていくのは子育て世代の若年層。残るのは年金で生活している高齢者。結果、現在、夕張市は日本一の高齢化48％なのです。そんななか高齢者の方がたくさん亡くなったかというと、死亡率は横ばいだったのです。高齢者や重い病気の人が夕張から引っ越したわけでもない」

これは世紀の大発見くらいに興奮したそうです。

薄利多売の過剰医療が病気を作っている

森田先生の本はここからが本題に入っていきます。くわしくはぜひ読んでいただくとして、私たちがなるほどと思った項目を少しだけ紹介します。

先生は東大大学院の研究班と夕張の医療崩壊前後のデータを集計分析していました。そこで医師になってから2度目の衝撃を受けます。

それは、日本の都道府県でひとりあたりの病床数と医療費に倍以上もの差があったのです。病床数が多く医療費をたくさん払っている県は少ない県より多く病気になっているのか。住んでいる都道府県によって2倍も病気になりやすいのか、となりますが、同じ日本人でそんなことはないわけです。

「これまで病人がいるから医療があると思っていたけれど、このデータを見ると、病床があるだけ病人が作られることになります」

だとすると、病院はなくなったけれど病人は増えなかった夕張市の例がいろいろなことを物語っているようです。

「ベッドが空いているからといって入院を勧めるわけでもない。老衰としか言えない状態ならしっかりとその老化の過程に寄り添う。逆に本当にＭＲＩが必要なら都市の病院に紹介する。医療機関の経営

に振り回されることなく、ひとりひとりの患者さんに対して、過剰でもなく不足でもない最善の医療があったのです」

この話を聞くと、今の日本の医療は過剰なのかもしれません。この本にも、ＣＴやＭＲＩの保有数は世界一。病院数も世界一。人口当たりの外来受診者数は世界２位。と書かれていました。先生は

「医者数は少ないのに医療機器や検査機関、病院数は多く、国際的にみて異次元レベルの薄利多売の世界なんです。どの病院も満床を目指すから、いざ急患が来ても救急車がたらいまわしにされてしまう現状」

このように経済学的観点から見るのがいかにも森田先生です。また医療機関同士が医師の資質や能力をチェックする機能がないのも問題だと。

『医療経済の嘘』病人は病院でつくられる
森田洋之著（ポプラ社刊）

医療問題は誰が悪いのか 犯人捜しより自己変革

そんな先生も最初は、高齢者の患者さんに胃ろうや点滴は標準的な治療であり、マニュアルにある治療は必要なものだと思っていたそうです。しかし、夕張で、患者さんや家族の気持ちに向き合った医療を目の当たりにして、価値観が１８０度変わったといいます。

とある95歳を超えたアル中のおじいちゃんは、肝臓も肺もボロボロなのに朝から自宅で焼酎を飲んでいる。

「これは医学的にいえば完全にアウト！すぐ入院、お酒を止めて治療しましょう、となる」

しかしおじいちゃんはこういったそうです。

「95を超えてるんだから検査したら何かあるに決まってる。何もしないでくれ。それでも検査しろって、じゃ、なにか？検査したら、入院したら、病気がピシャっと治って１００メートル走れるようになるのか？」

ごもっともです。好きなことを好きなようにできない入院生活でわずかの寿命が延びてもいかがなものかと思ってしまいます。ましてや95歳。好きなように余生は送りたいはずです。

「昔は死因の上位は結核、肺炎、胃腸炎（腸チフス、赤痢）などが大半だった。日本人の多くは感染症によって命を落としていたことになります。しかし、抗生剤が登場し、清潔な環境、外科手術と輸血も手に入れ、感染症はほぼ治る病になったのです。現代医療の大躍進の時代になった」

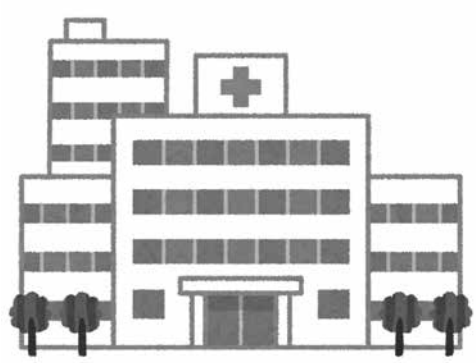
みんなが病院に行けば病気が治る、病院神話、医者神話が生まれたのはこのような背景からなのでしょう。しかし、

「今、死因の上位はがん、脳卒中、心疾患など、完全には治らない、長く付き合っていく病気です。加齢に伴って自然に増える病気です。大半は高齢もしくは複数の疾患を

抱えた方々です。慢性疾患をひとつひとつ獲得しながら歳を重ね、長い療養の後に死を迎えるのです」

そうなるとこれまでのような確実に治す医療は影をひそめる時代にきているのでしょう。

先生は最後に、今の膨大な医療費、薄利多売にならざるを得ない病院経営、人間の尊厳を奪ってしまう標準治療など、こんな状況を産んだ現状に、いったい誰が悪いのかと犯人捜しをしても仕方ないといいます。人のせいにしても何も変わらないのです。私たちができることから気づかないといけないといいます。



ではそれは何か。

「病気や病院のことはよくわからないから先生に任せよう、安いから薬をとりあえずもらおう。ではなく、薬を飲む前に今の生活習慣で直すべきところは？　ＣＴ、ＭＲＩをありがたがって大きな病院に通おうとしていないか、自分に、家族に本当に必要な医療は何か」

そこから始めてみようといいます。

この本を読んで思ったことは、医療経済の拡大が必ずしも健康と比例しないという現実。医療という手段ではなく、医師と患者さんの信頼、地域との絆やつながりが豊かな終活になるということ。先生はそのことを医学的に、経済学的に描き出してくれています。

ＳＯＤ様作用食品
体験者の声を
お聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川１-15-2　Ｂ棟2802
日本SOD研究会　宮城宛
TEL 03－5787－3498
までご一報下さい。

◆丹羽先生診察ご希望の方は
御紹介、御予約いたします。
※自由診療となります。
丹羽メディカル研究所
☎０１２０（７３１）１７５
もしくは
日本ＳＯＤ研究会
☎０３（５７８７）３４９８
まで　お電話ください。

●ＳＯＤ様作用食品とは●
丹羽博士の開発

ＳＯＤとは、スーパーオキサイド・ディスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康のカギを握る物質として「活性酸素」と「ＳＯＤ」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くＳＯＤという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のＳＯＤだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにＳＯＤという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されませんでした。それを、内服できるように研究されたのが丹羽ＳＯＤ様作用食品です。

開発した丹羽靭負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにＳＯＤの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った〝自然の摂理〟は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。〝病気は自分が治すもの〟私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐清水病院院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、ＳＯＤなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。
最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。
「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのでしょうか?」というような、ご質問をよくいただきます。
その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴

原寸大　横 30mm、縦 25mm

- **管理番号は６桁**
  ※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- **シール左部分に絵や記号が記載されている**
  ※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- **他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある**